

市長は、かつて幼稚園を経営し、その幼稚園でバスの運転手をしたり、子ども達と遊んだりしていました。平成31年2月12日、次の話を政策秘書課の職員に話し出しました。

ユキだよ～

いつものようにオレンジ色のあいさつベストを着て、市内を歩いていたら、車の中から通りすがりに、「一平せんせい。ユキだよ～。」と声を掛けられました。

一瞬のことだったので、車の中にいる人の顔は分からなかったのですが、「ユキだよ～」という話し方で、「あの子かなあ？」と思い浮かぶ顔がありました。

私が顔を思い浮かべた子なら、40代前半になっているはずなので、「ユキだよ～」とまるで5歳の子どものようには言わないで、「ユキです」と言うんじゃないかと思いつきながら、真相を確かめるため、後日、その子の家を訪ねてみました。今は別のところに住んでいるということで、お父さんが連絡をしてくれて、あとで本人から「そうです。私ですよ」と電話をもらいました。



なぜ、わざわざ、その子の家にまで確かめに行ったかということ、「ユキだよ～」と声を掛けられたことが、とても嬉しかったからです。

「ユキだよ～」の、たった一言で、私は一瞬にして、30代の自分に戻ることができました。まさに走馬灯のように、当時に思い出が、頭の中を駆け回ったのです。

もし、その子から、「お元気ですか？ ユキです」と、かしまったあいさつをされたら、30代に戻ることも、思い出が頭を駆け回ることもなかったと思います。「ユキだよ～」と声を掛けてくれた子も、もしかすると一瞬、子どもの頃に戻ったのかもしれない。

私は、自分のことを覚えてくれている人がいること、自分に声を掛けてくれる人がいることが、こんなにも嬉しいことなのだと、改めて感じました。それが、ふるさとだと思いました。

ゆきさん、あのとき、声をかけてくれて、ありがとう。

～市長の話聞いて～

「『ユキだよ～』と声を掛けられたんだ。」と話す市長は、それは、それは嬉しそうでした

私からすると、幼稚園の先生の顔を覚えているユキさんの方がすごいと思ってしまいました。なぜなら、私は先生の名前は覚えているけれど、顔は全く覚えていないからです。

自分の昔を知る人と話すのは、気恥ずかしくもありますが、昔、お世話になった先生にお会いして、私はどんな子どもだったのか聞いてみたいなあと思います。同級生とも久しぶりに会ってみたいと思いました。まさに、それが「心のふるさと」だと思いました。